

チェコの児童の自由画

—題材による特徴—

島田由紀子

(聖徳大学短期大学部 非常勤講師)

1はじめに

本論の前にチェコ共和国、また児童画の収集を行った地域の様子について述べておきたい。

チェコ共和国は、1993年にチェコスロバキア連邦がチェコとスロバキアに平和的に分離した国である。人口は約1000万人で日本と比較しても小さな国家であることがわかる。政治的、また経済的には中央集権化した国家体制を議会制民主主義と市場経済体制へと移行しているのだが、現実には共産主義政権のなごりは随所に感じられる。だが、現実にイギリス資本の大手スーパー・マーケットやアメリカ資本の外食産業の進出が成功し、EUへの参加を望む政府の動きがある一方で、それを望まず、共産主義時代へ戻りたいと考える人々も少なくない。社会的、経済的変化の過渡期にあることがわかる。

またチェコでは女性が職業に就くということは当然のことで、結婚や出産によって職場から退くという考えはない。そのような社会的背景からも、就学前の子どもたちにとって、幼稚園（保育園は存在しない）は1日の大半を過ごす重要な教育の場であり、生活の場である。私立の幼稚園は少なく、ほとんどが公立である。日本の文部科学省のように決められた指導要領や指針のようなものではなく、各園の園長先生の方針が幼稚園の特色に反映されていることから、公立であってもある程度、特色を持った教育ができるようである。

幼稚園教諭になるためには、中学校を卒業後、専門の高等学校で学ぶ必要がある。幼稚園教諭の給与は低いことからほとんどが女性である。

2-1 プラハ1区の幼稚園

プラハ1区は街のほぼ中心にありことから観光客も多く訪れる場所である。建物は幼稚園というよりはヨーロッパの小中学校を想像させるような外観で、園内の敷地には園庭がなく、道路を挟んだ向かいの高等学校の校庭の一部を区切って使用している。3歳から小学校入学前の子どもたちが通っていて、1クラス12~20名の1学年3クラス編成である。先生はクラス担任制で、1日の勤務を早番、遅番といった交代制になつており、これは他の公立幼稚園にも共通している。1

日の生活は時間割表によって基本的には決められている。この園の特色はランチ（給食）を教室とは別の食堂でとるという形式にしていること、また登園した後、20分程度、全員が円になって話しをする時間を設けていることである。造形教育については、毎週テーマを決めて道具や画材の使い方を教えている。

2-2 プラハ10区の幼稚園 ①

プラハの中心地から地下鉄とバスで乗り継いでいく10区は、1区の商業的な様相は感じられない。新しくできた大手企業の進出、工場、またそこに働く人々のための団地やマンション、住宅が建ち並び、少し前の東京郊外を思い起こさせる。園児は113名、先生24名の他、英語とダンスの専門の先生がいる。また希望によりフルートや水泳の指導も専門のスタッフにより指導を受けることができる。園長に意向により、特に音楽教育に力を入れている。造形活動は、行事を通じてのプレゼント交換のための制作、父兄に成果を発表する機会を設けていること、展覧会に出品するなど、作る楽しさを味わうだけではなく、何か成果と結びつく方法をとるような傾向が伺えた。染色や織、陶芸などの制作も行っている。

2-3 プラハ10区の幼稚園 ②

もうひとつ訪問した10区の幼稚園は、4人110人の子どもたちが通園している。特にスポーツに力を入れており、スケートとプールの選択授業を実施している。造形では年に1度、教室中を飾る期間を設け、共同制作することを行事に組み入れている。テーマを提示し、それに基づき歴史や生活環境について調べ、それを制作に結びつけるという総合教育がそこでは展開されている。

2-4 シュタイナー幼稚園

幼稚園の建物は一見普通の幼稚園であるが、エレベーターと各階に調理室が設けられ、充実した設備であるように思われた。造形活動は絵画をはじめ、刺繍や自然の素材を用いた活動を積極的に行っている。特に興味深い点は室内の色彩である。色彩の使い方はシュタイナー独自の法則に応じたもので、先生が自ら壁面を塗っている。そのほか、季節ごとに室内の飾りを変

えたり、遊びの道具も先生と父兄とか協力して作るなど独自の教育を実践している。

3 目的

チェコと日本では、性による色の使い分けがなされていない。具体的に例を挙げると、「男の子色」「女の子色」といった使われ方もされていないので、男の子には青、女の子にはピンクといった洋服や玩具を与えているわけではないようである。前報までは色彩好悪、自由画にみられる出現色について焦点をあてた。チェコの幼児の色彩好悪に対する調査結果から、「好きな色」には性差があった。自由画の使用色数は女児の方が多く、男児は寡色傾向、多色傾向の二分化が伺えた。したがって性による色彩の区別がなされていない環境にあっても、好きな色や表現される色も、性差による違いがあり、また日本の幼児の調査結果とも類似する点が多くあった。

文化や環境が異なっていても、幼児には共通した色彩表現というものが存在するらしいということがわかったわけだが、ここでは自由画の内容について取り上げ、どのような内容が描かれているのか、それは環境によって違いや共通性があるのか、ということについて取り上げようと考えた。

4 方法

- 4-1 手書き 自由に絵を描くように指示した。
- 4-2 画材 B4の画用紙1枚と16色の日本製のクレヨン
- 4-3 被調査者 上記のプラハの幼稚園とトホロビツェの小学校のに通う4歳から8歳までの73名。
- 4-4 調査日時・所要時間 2000年9月・約30分。

表1 児童画判断上の注意

項目	説明
自然	空や太陽や樹木など、すこしでも自然が描かれていればここに入れた。しかし、地球全体や宇宙を描いたものは含めなかった。
自然中心	自然界の事物が、絵の中心、テーマになっているもの。
生き物	生き物すべて。しかし、怪獣は空想上のものなので除いた。擬人化動物や顔だけの動物は除いた。
自由生き物	籠や家に入っていない生き物。
生き物中心	生き物が絵のテーマになっているもの。
植物	植物すべて。
自然植物	花瓶の花や植木鉢の木などは除く。植物の周囲に囲いのないもの。
植物中心	植物が絵のテーマになっているもの。
自然の遊び	釣り、キャンプ、スキー、雪合戦、登山、凧上げなど自然界にとけ込んで、その中の遊びを楽しんでいるもの。
造形・装飾	絵の中に造形的な要素や装飾的な要素を含むもの。
漫画	漫画のキャラクター、ロボットなど。子どもが考えたものではあるが、ふざけた表現のもの。サッカーのマークなどは含めず。自然と漫画の両方が描いてあるものは、両方に数えた。
漫画中心	絵の中すべてが漫画のもの。

5 結果と考察

自由画の内容については、まずいくつかの分類が必要だと考え、増田の先行研究を参考に行った（表1）。

先行研究では「自然」を描いた描画がもっと多いが、チェコの幼児についても男女児ともに70%以上の描画にみられた。ついで「植物」と「自然植物」、「生き物」が多い。特徴的なのは「自然の遊び」を描いてるもの、「マンガ」の描画が少ないということである。

描かれている「自然」や「生き物」「植物」は、空想の世界を描いたのではなく、自分の別荘の風景であったり、祖母の家の周辺である場合が多く、生活に関わった景色を描いているようだ。また「家」を描いた描画、「家」を中心に描いた描画も多い。逆に「マンガ」の影響はほとんどみられない。テレビ番組の中で子ども向けアニメーションは少なくないが、描画には表れていなかつた。また、男児は「乗り物」が描かれ、女児の描画には「お姫さま」や「女の子」が描かれているのは、日本の幼児の描画にもみられる傾向である。

「植物」については、女児の方が比較的並列的な表現が多くみられるものの、男児の描画にも並んだ木の風景は描かれている。「造形・装飾」が10%以下なのは、年齢が低くデザイン的な装飾や模様に関心が少ないと認めではないかと思われる。日本の幼児の描画よりも日常生活が描かれていることやマンガの影響が少ないとこれがチェコの幼児の描画にみられる特徴であるが、男女児間の相違については、共通性がみられるようだ。

参考文献：「チェコの幼児の色彩好悪と表現」島田由紀子 美術科教育学会 筑波大会 2001／「児童画に関する比較研究 一日本（北海道）と英国（北アイルランド）の場合一」増田金吾 平成10-11年度科学研究補助金基盤研究 研究成果報告書 平成12年